

して過ごしたこともありました。

やがて暖かい季節となり、伐採作業も終わって元の収容所に戻りましたが、私は体力が低下、七十三キロの体重も四十九キロとなり、病人となりました。そのころ、弱い人から日本に帰す交渉がまとまり、昭和二十二年六月六日、帰国のため、ソ連領ナホトカより乗船し、昭和二十二年六月十五日、舞鶴に上陸、復員いたしました。

あまりにも疲れ果て、疲労のためか、家まで帰る途中の記憶は残っておりません。

走馬灯

東京都 岩田 博

駄馬は声無く 人を曳き

歴史の屋根を 幾そ度

絵巻は綴る 大黄河

衣星霜に 涙留む

一筋ここに 戦士有り

作戦、討伐に明け暮れた北支衣師団が、一部を残して山海関を後にして関東軍編成下の北朝鮮（威興）に籍を移したのは、敗戦も間近い初夏の頃だったかと思う。当時はのんびりとした日々を送っていた。

ある日突然命令が出て、完全軍装で山の中に展開した。後でわかったことだが、国境付近に上陸したソ連軍を迎え討つべく……とにかく命令は混乱していた。次々に変わる命令にやっと一呼吸している時に終戦の噂がどこからともなく聞こえてきたのである。武器引き渡し。部隊長の割腹自決。日まぐるしく時は動いた。

広々と見渡す限りの練兵場に、つながれた軍馬のいななき、主の手元から離れた動物たち……「あんなに可愛がっていたのに」人間なんて全く勝手なものだ。私も思っていたし、恐らく馬もそう思っていたに相違ない。

内地に帰れるんだ、そう信じ込まされて乗った貨物

船の上下は人いきれで右往左往していた。

やっと着いたと思つたら「あ、ここはソ連だ！」どこからともなく聞こえてくるため息、これからどうなるのだらう、不安は貨車への詰め込みによつてかき消された。軍馬は船から吊り下げられ、主の違う運命きだめの第一歩をウラジオに印したのである。

興凱湖のはとりでやっと作業に出た頃はまだ寒いとは言えなかった。その後ウオロシロフ俗称第一分所に移った頃は既に十二月の声を聞いていたと思う。初めての冬、ここでの生活は目茶目茶だった。電灯はなく作業の時くすねてきたグリスを缶詰の皿に包帯の芯で点火し、中国の討伐でやっていたように手元だけの照明である。すすけた顔があちこちからのぞき込んでいた。ペーチカはあったが使われてはいなかった。襟元には風の連合艦隊が活動していた。

一日の作業は酷寒のさなか屋外での朝の点呼より始まる。我れ先に良い条件の所へ行こうとトラック目ざして兵隊達は殺到した。そこには軍隊の統制も秩序も無視されていた。のろまな兵隊は一日中吹きさらしの

河川敷の作業にその身を寒風にさらしていたことであらう。

庭にしつらえられた深さ一間ばかりの露天掘りの便所に渡された材木の間から用を足す。そこは凍りついた逆さ「ツララ」の便が痔の赤い血で染まっていた。この頃になると今日は二人明日は三人と、遠い望郷の念に駆られつつ凍土に骨を埋めた人々が多くなつてきた。

この第一分所の長は我が部隊の中隊長だったが、ロシア人の御機嫌を取るばかりで兵隊の待遇を彼等に交渉するだけの度胸がなかったに違いない。我が部隊だから名前は伏せておくとして、木剣を振り回して兵隊達をたたいて歩いたのでは誰しも良く言う人間はいない。ちなみに、毎年行われる靖国神社の師団慰霊祭には来たことがない。死人の数では地区随一だったのではないか？ 後で復員船の中で「海へ投げ込んでしまえ」と周囲が騒いだ噂を聞いたが恐らくそうだったかも知れない。

この魔の収容所を出て別の収容所に移ったのは二、

三カ月たってからのことである。驚いたことにこの長は関東軍の津森参謀であった。今までのどん底の環境に比べ、参謀肩章を付けた良か男の「気は優しく力持ち」を地でゆく中佐なのであった。「君は現役か？」なんて言われたが現役には違いない、二十を少し過ぎたくらいなのだから。「自分は喜多大将の参謀だったんだ」とも言っていた。そんな人が我々みたいな兵隊に気軽に話すとは、これはえらい違いだなと思った次第である。

貨車の積み下ろし、砂糖大根の貨車下ろし、汽車工場、石鹼工場、都会的な作業だったからどうやら死なずに済んだが、話に聞く伐採や鉄道の敷設、または炭鉱の作業だったら、東京の人間である私ではとうにシベリアの土になっていたかも知れない。「人間万事塞翁が馬」振り返って見ればよくもまあ生きたものだといふ事に思ふのである。

中国に対する戦犯の調査が間もなく始まり、シベリアより中国に引き渡されて、人によっては十年も留め置かされたと聞く。もちろん師団長も旅団長も戦犯で

ある。大体我が師団は沖繩に行くよう既に命令が出ていたが、あまりに中国に深入りして速やかには足抜けできないということで、そのかわりに中国の他の師団が派遣され、そして全滅の憂き目を見たのである。なんとまあ軍隊とは運隊なんだなあとつくづく思うことである。

シベリアにおける電話線工事

東京都 岩 淵 鉄 夫

私は当時、電気通信工業学校に通学しておりましたが、昭和二十年に徴兵検査が一年繰り上げとなり、二月に満州牡丹江電信第十七連隊に入隊。六カ月で停戦となり、武装解除でソ連軍の捕虜となり、「東京ダモイ」の名のもとに貨物列車に乗せられてバイカル湖畔のイルクーツクに降ろされました。ここでシャワーを浴び、辿り着いたところはタイセット。間もなく知らぬ者同士が呼び出され石岡班長のもとに通信隊が結成